

心の輪を広げる体験作文 中学生部門 ◆佳作

「眼鏡の僕から見える世界」

神奈川県立相模原中等教育学校 二年 鈴木 すずき 豊久 とよひち

学校から一枚の通知が来た。視力検査の結果についてというお知らせである。そこには、かかりつけ医などでの再検査、相談をすすめる内容が書かれていた。それを持って、眼科に行ったら視力がおちたのは身長がのび骨格が変わったからと言われた。眼鏡屋で新しい一番人気だという眼鏡を買った。

眼鏡をかけると今まで見えなかった黒板の字が、見えるようになったりする。

眼鏡が僕を支えているのか生活しやすい。

良い相棒ができた。

言葉が遅かった僕は小さい頃療育の所に行っていました。そこには友達がいきました。僕とその友達はお互いに負けず嫌いな所があつてよくぶつかったりする事もありました。けんかもしました。しかし、負けず嫌いであるという事は負けないように頑張ろうとする事でもあり、悪い事ばかりではありません。やれた時、出来た事は達成感が味わえるということでもあります。その友達はとても頑張りがやさんです。

療育の先生や、その場所ではたくさんの経験が出来ました。音が苦手、話すのが苦手、人に触れられるのが苦手など僕は療育の所で、さまざまな人がいる事を知り、それが必ずしも悪いことではない事を学びました。音楽や絵などで、すごい能力や才能を持っている人もいます。人には得意な事や苦手な事があり両方を伸ばす手助けの場所や支援が必要です。

障がいというと、体に不自由があると思うかもしれませんが、しかし、内面的な見えない障がいなども存在します。さらに、障がいとまでいかないにしても、その人の特性というものは少なからずあるはずです。そういったさまざまな人達にちよつとずつそれぞれに合った眼鏡のような、サポートをすることによって生活しやすくなります。少しずつでも支援でき、良い方向に進める事が大切だと、僕は考えました。できることで、活躍できる環境づくりも大事です。

多くの学校は眼鏡っ子が多い。みんな少なからず眼鏡に支えられてる事になる。

みんなが眼鏡をかけるように、必要なサポートをうけ、生活ができるようになると思ひます。

障がいの有る無しに関係なく、すべての人が自分らしく過ごせる環境や、社会になればいいと思ひています。

その友達とは、年賀状を、交換する仲で、学校は違ひけど、お互

いを認め合う事のできる関係になっています。

目にもえなくわかりづらい、理解されにくい特性など、いろいろな人がいることを、学校の眼鏡っ子たちにも知ってほしいとぼくは思いました。